

2012年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ報告

著者	井上 千鶴子, 金田 忠裕, 北野 健一, 中谷 敬子, 五十川 敬子, 川谷 亮治, 杉原 一臣, 田中 愛子, 田中 洋一, 西村 日出男, 福山 智子, 藤田 直幸, 眞野 祥子, 森谷 利香, 山下 哲, 山本 勇
引用	大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要, 2013, 47, p.49-56
URL	http://doi.org/10.24729/00007563

2012年度ティーチング・ポートフォリオ作成 ワークショップ開催報告

井上千鶴子^{*1}, 金田忠裕^{*2}, 北野健一^{*3}, 中谷敬子^{*2}, 五十川敬子^{**1}, 川谷亮治^{**2},
杉原一臣^{**3}, 田中愛子^{**4}, 田中洋一^{**5}, 西村日出男^{**1}, 福山智子^{**6}, 藤田直幸^{**7},
眞野祥子^{**6}, 森谷利香^{**6}, 山下哲^{**8}, 山本勇^{**9}

A Report on the Workshop of Teaching Portfolio in 2012

Chizuko INOUE^{*1}, Tadahiro KANEDA^{*2}, Ken'ichi KITANO^{*3}, Keiko NAKATANI^{*2},
Keiko ISOGAWA^{**1}, Ryoji KAWATANI^{**2}, Kazuomi SUGIHARA^{**3}, Aiko TANAKA^{*4},
Yoichi TANAKA^{**5}, Hideo NISHIMURA^{**1}, Tomoko FUKUYAMA^{**6}, Naoyuki FUJITA^{**7},
Syoko MANO^{**6}, Rika MORIYA^{**6}, Satoshi YAMASHITA^{**8} and Isamu YAMAMOTO^{**9}

要旨

大阪府立大学工業高等専門学校は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催した。その後、2009年度に第2回、2010年度に第3・4回、2011年度に第5～7回、2012年度に第8・9回目となるティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催し、現在常勤教員73名中44名(60%)がティーチング・ポートフォリオを作成している。本稿では、2012年度に開催したワークショップの概要について説明した後、ワークショップ参加者の感想を報告する。

Key Words: teaching portfolio, faculty development, mentee, mentor

1. はじめに

大阪府立大学工業高等専門学校(以下、本校と略す)は、2009年1月に全国の高等教育機関で初めて学内でティーチング・ポートフォリオ(以下、TPと略す)作成ワークショップ(以下、WSと略す)を開催した^[1]。2009年度に第2回^[2]、2010年度に第3・4回^[3-4]、2011年度に第5

～7回^[5]、2012年度に第8・9回目目のTP作成WSを開催し、2013年5月現在常勤教員73名中44名(60%)がTPを作成している。本稿では、2012年度に開催されたTP作成WSの概要について記した後、第8回および第9回のWSに参加したメンティーの感想を記す。なおTPについての詳細、特徴等については既報^[1-5]ならびに書籍^[6]を参照されたい。

2. ワークショップの概要

2012年度に開催したTP作成WSの概要を表1に示す。第8回はアカデミック・ポートフォリオ(以下、APと略す)作成WS、第9回はAP作成WSに加え、さらにスタッフ・ポートフォリオ(以下、SPと略す)作成WSも兼ねる形で実施した。1名のメンターが担当するメンティーは1～2名と、メンターにとって負担が少ない形で開催することができた。おもなスケジュールを表2に示す。スケジュールは、第8回、第9回とも同じである。個人メンタリングは3日間で4回とし、TPの提出は2晩とも午前0時までには担当メンターとスーパーバイザー宛に電子メールで提出とした。なお、夜の食事は任意参加としたが、ほとんど全員が参加された。

2013年 8月19日 受理

*1 総合工学システム学科 一般科目文系
(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

*2 メカトロニクスコース
(Mechatronics Course)

*3 一般科目理系
(Natural Science)

**1 帝塚山大学
(Tezukayama University)

**2 福井大学
(Fukui University)

**3 福井工業大学
(Fukui University of Technology)

**4 山口県立大学
(Yamaguchi Prefectural University)

**5 仁愛女子短期大学
(Jin'ai Women's College)

**6 摂南大学
(Setsunan University)

**7 奈良工業高等専門学校
(Nara National College of Technology)

**8 木更津工業高等専門学校
(Kisarazu National College of Technology)

**9 神戸女子大学
(Kobe Women's University)

表1 2012年度に開催したTP作成WSの概要

回	日程	メンティ ー	メン ター	スーパーバイザー (所属は当時)
8	8月8～ 10日	12名(うち 学外6名)	8名	栗田佳代子氏(大学評 価・学位授与機構)
9	12月26 ～28日	6名(うち 学外6名)	6名	栗田佳代子氏(東京大学)

表2 TP作成WSのおもなスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人メンタリン グ(2) TP作成作業	個人メンタリング (4) TP作成作業
午後	オリエンテーシ ョン 個人メンタリン グ(1) TP作成作業	個人メンタリン グ(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテー ション 修了式
夜 間	夕食会 TP作成作業	夕食会 TP作成作業	

3. ティーチング・ポートフォリオを執筆して

五十川敬子 私がTP作成WS参加を考えたのは、2012年3月に京都産業大学で開催された「第17回FDフォーラム」で「ティーチングポートフォリオの組織的導入と活用」と題する分科会に行ったことから始まる。英語教育を専門とする私は「ポートフォリオ」という語に惹かれ、この分科会に参加した。外国語教育関係者がポートフォリオと聞いてまず思い浮かべるのは「ヨーロッパ言語ポートフォリオ」(European Language Portfolio)であり、これは日本の外国語教育分野への応用や示唆の点でも注目されているホットなテーマの1つである。

分科会で説明されたポートフォリオは北米発祥の大学教員のためのポートフォリオで、軸になる必須項目はあるが、専門分野を問わず柔軟に作成できるポートフォリオだということがわかった。その必須項目というのが、①教育の責任 ②理念 ③方法 ④学習成果 ⑤今後の目標の5点である。ここで思い出したのが、私がかつて取り組んだカナダのブリティッシュコロンビア大学のTESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages: 英語を母語としない人向けの英語教授法) 資格取得のための修了課題であった。99ページにわたる修了課題の構成は、①Background Information ②Rationale ③The Lesson Plansの3部から成るもので、TPの最初の3つの構成要素と似ているなと思った。TESOLの修了課題では、Background Informationで想定する学習者が置かれた状

況について説明し、Rationaleで外国語教育理論に基づいた自身の教育理念を述べ、The Lesson Plansで自分の教育理念に基づいた自作教材と教案を添付した上で、教育方法を記述した。ただTPに含まれる「エビデンス」と「今後の目標」という項目はない。TESOLの修了課題は、言わば理論を踏まえた上で自分の理想の英語教育を言語化したものであるのに対して、TPは自分の教育現場での現実を基にした教育理念の再構築と、教師としての方向性の再確認だった。そしてこれらは教師としての私のビフォーアフターの記録であり、理想と現実の記録であるとも言える。また、理論と実践を演繹的に統合させるか帰納的に統合させるかの違いであるとも言えるだろう。

TP作成WSは、大阪府立大学高専の先生方の運営の手際の良さと、細やかで温かい心遣いが素晴らしかったと思う。また、メンターの先生の的確な質問やコメントによって気づきやパワーを得ることもでき、密度の濃い3日間だった。約1年前のTPの完成以降、自分のTPを見返すこともなく何を「短期目標」としていたのかも忘れていたのであるが、このたび4つの「短期目標」のうち3つを達成していたことがわかった。改めてTPの威力に驚いている。いつかTPを更新する時には、今よりも長期目標に近づいていることと思う。

川谷亮治 1984年工学博士の学位を取得し、しばらく助手を勤め、1990年講師に昇任後、講義を担当することとなった。それから20数年の年月が経過した。毎年、無い知恵を絞り出しながら試行錯誤を繰り返していく中で、自分なりの講義のスタイルは作り上げてきたつもりである。ただこれだけ年数が経つと、講義がマンネリ化していくことは避けられず、でも仕事の忙しさを理由に、新しいチャレンジに対して二の足を踏み続けている状態であった。そんなとき、2012年9月に福井大学で開催された栗田先生のミニワークショップに参加する機会を得た。そこでTPを作成すると何かが見えるかもしれない、という期待感をもつことができ、同年12月に開催された大阪府立大学高専のWSに参加することとなった。

事前に送られてきたスターターブックに目を通し、スタートアップシートも結構な時間をかけて作成したつもりである。しかし、大きな壁となったのが「理念」という二文字である。前述のとおり、自分が担当する講義に対しては、自分なりのスタイルを作れているとは思いますが、それではその根底にある「理念」は、と問われたとき、キーを打つ手が完全に止まってしまった。「理念」ということを一瞬でも考えることなく講義を続けてきたことは事実である。でも、「理念」ってやっぱり重要、であることはなんとなく理解はできる。ということで、WSの会場に着くまで考えてはみたものの、何も出てこない。困惑

のまま、WSが始まった。WSそのものはよかったと思う。自分のこれまでの教育についてじっくり時間をかけて振り返ることができた。これから取り組むべきことも見えてきたように思う。さらに、他の参加者の取り組みや考え方に触れることもできた。同じ時間を与えられたとしても、大学の自分の居室ではとても実現できない充実した3日間を過ごすことができた。

しかし、正直なところ、自分が納得できる「理念」にはいまだに出会えていない。でも、最近は何れでもよいのかな、と思っている。「理念」に対して、これだ、という正答があるとは思えないし、時間をかけても追い続けていくことにこそ価値があるものなのかな、とも思う。定年までの残り年数が両手の指で数えられるようになってしまったが、自分の頭の中のモヤモヤした霧が晴れるように努力は続けていきたいと考える。

私のメンターを担当していただいた西田先生をはじめWSの関係者の方々に心より感謝したい。ただ、1点だけお願いがある。日程的に厳しいとは思いますが、最終日に組まれているプレゼンテーションにもう少し時間をもつことはできないだろうか。同じWSの参加者の話を聴くことは大いなる刺激になり、かつ参考になると考える。

杉原一臣 平成24年12月末に開催された、第8回TP作成WSに参加した。平成15年4月に福井工業大学に教育職員として着任し、参加した当時は在籍10年目という節目の年であった。

所属する工学部経営情報学科は、「経営」および「情報」をキーワードに、様々な企業経営に資する人材（企業経営者）の育成に主眼を置き、情報倫理を備えつつ、マネジメント関連技術や情報通信技術（ICT）に関する専門的な知識や技術を有する人材の育成に取り組んでいる。自身の担当科目は、専門分野（OR：オペレーションズリサーチ）の特性から、2年次から3年次にかけて、経営関連および情報処理関連の専門コース（経営システム・情報システム）を横断する形となっている。一方、時代と共に多様化する学生のモチベーションに対応し、彼らの求める専門性に基づく目標設定、並びに、その目標を前提とした授業改善に際限は無い。その一方で、様々な学内業務に携わる中で、自身に確固たる教育理念が備わっていないことに少なからず焦りを感じていた。このような状況下で、TPの存在を知ることとなった。

TPについては、当時のFD推進委員長からの紹介及びFD関連の研修において、何度か耳にしたことがあり、「メンターとの面談を通じた、エビデンスに基づく資料作り」といった漠然とした認識はあった。WS参加の契機は、福井県内にある高等教育機関による大学間連携（フレックス）において、他の参加校のメンバーより紹介を受けた

ことである。この連携では、仮想的学習コミュニティの整備や相互研修型FDなどの活動が行われており、これらの活動を通して、県外への先駆的な活動に関する様々な情報が得られている。TPWSもその1つである。

3日間、授業や研究等の活動から遠ざかって、自分の教育活動を振り返った講習会は、非常に有意義であった。大学や専門分野の垣根を越えた交流は、自身の抱える問題解決に関して多くの示唆を含んでいた。また、メンターが自身の取りとめのない話を整理してくれたことや、整理した上で提示された様々なアドバイスは、抽象的で非常に覚束なかった自身の教育理念をより鮮明にする特効薬であった。ただし、WSにおいて、資料作成に多くの時間を費やしたため、エビデンスと評価との結びつけを十分に行えなかったことが、唯一の心残りである。

最後に、TP作成にあたり、WSの紹介及びWSで貴重な提言を頂いた方々に感謝の意を表したい。

田中愛子 この機会に自分自身の教育観を振り返ってみようと、平成24年8月に大阪府立大学工業高等専門学校で開催されたWSに参加した。参加にあたっては、誰もがそうするように、私もスタートアップシートにあらじめの情報を準備し、あとはポートフォリオを作成することを目標にWSに臨んだ。

1日目にポートフォリオのアウトラインを書くことができたので、残り1日あれば書き終えることができると思っていた。

2日目の朝、メンターとの面接があった。色々な話をしたあとで、メンターから「今書いてあるようなことが、田中さんが本当に書きたいことですか？お話から伝わってくる迫力と、書いてあることが少し違うように思えるのだけど。」と尋ねられた。私は思わず「本当に書きたいこと？」と聞き返した。そしてその瞬間から、私自身の苦悶の時が始まった。私がこれまで教育の中で大事にしてきてこれからも大切にしていきたいこと、目標にしてきた看護師や研究者や先生たちのこと、様々なことが思い起こされたが、まとまらなかった。文章に記述していることと、自分自身が真底大切にしていることが乖離していることに気付いた。しかしそのことが明確にならず、文章に出来なくなった。ペンが止まった。腕組みをして色々考えてみた。それからようやく、真剣に自分自身を振り返る旅に出ようと決意した。時間は容赦なく過ぎ去ったが、この際、徹底的に自分自身と向き合ってみようと思った。

それまでの私は、自分の歩みを振り返れば、自分の価値観や信念に気付けると安易に思っていた。が、必ずしもそうではなかった。振り返り方があると気付いた。それは、自分だけではできなくても、メンターの助言で可

能になることがある。私はメンターとの対話を通して、自分自身を真剣に見つめ、自身の価値観や信念を問い直すことができたと思う。

3日目の報告会では、なぜか涙が出て止まらなかった。私がこれまでに無意識のうちに大事にしてきた「本物の追躰」というキーワードに辿りつけたからだ。メンターのおかげである。

今こうして1年前のWSを振り返り、あの時から、新たな自分自身の歩みが始まったことを実感している。自分自身と真剣に向き合う機会をあたえてくださったWSと、そこで出会ったメンターの中谷先生をはじめ大阪府立大学工業高等専門学校先生方に心から感謝申し上げます。

田中洋一 大阪府立大学高専 TP 作成 WS に参加した理由は、私達が日本でのユーザーコミュニティを立ち上げた「オープンソース e ポートフォリオ Mahara」の普及に繋がたいという、ちょっと不純?? な動機でした。しかし、実際に2泊3日の研修を経験すると、考えが大きく変わりました。今では、e ポートフォリオ・システムはTP公開や情報共有といったTP作成後のサポートには効果的ですが、3日間におよぶ「対面での対話」がなければ、表面的に活動をまとめたTPにしかならないと考えています。

実際のTPWSは、事前にスタートアップシートを記述することにより、所属機関の教育理念から教育実践をトップダウン的にまとめ直します。また、WS最初のミニワークにより、自分の教育方法に基づき目的、エビデンス、目標を考えていき、ボトムアップ的に整理します。TPを書いて行くと、これらトップダウンとボトムアップ両方の視点を持つ大切さが再認識できます。その後、私が実践してきた教育方法や目的等に関するメンターからの質問へ回答していくことにより、幅広く活動してきた教育・研究・地域貢献に対する考えが徐々に整理されていきました。専門分野が異なるメンターへ自分の足跡を語る事がこんなにも意味あるものとは知りませんでした。メンターといろいろな事について話をしていると、頻出するキーワードが見つかり、自分の教育理念に繋がるヒントを得ます。また、TPを書く際、教育課程等、トップダウンの思考に偏りがちな私に、担当授業の大切さを気づかせてくれたのもメンターでした。

WS環境として、TP作成に3日間予定を空けていることや作成部屋には同じ目的に取り組む仲間がいることが思考や作成の集中力を高めてくれます。そして、昼食や夕食での情報交換会におけるメンティーやメンターとの議論がとても重要であり、実践共同体(Community of Practice)を構成していると感じました。1対1のメンティーとメンターでTPを作り上げるのではなく、共同体全体で取り組んでいるのです。私がTPを書いた2012年

8月から1年間でメンターを4回務めました。メンターを経験すると、実践共同体の存在や意義を一層感じました。メンターチームは、私の教育理念「学びあい」の場であり、福井県学習コミュニティ推進協議会(Fレックス)で推進している相互研修型FDの場だと思います。本TPWSでの経験を元に、所属校やFレックスでもTPを広げ、学生の学修ポートフォリオにも取り組みたいと考えています。

西村日出男

【TPワークショップ参加の契機】

総合学習などで児童、生徒に作成させるラーニング・ポートフォリオに興味があったこと、専任は退いたがFDとして自分に出来ることを模索していたこと、約40年間大学の講義を担当してきたが、マンネリ化しているのではないかと自己嫌悪を感じていたこと、学生のアンケートの中に否定的な記述が目立つようになったこと、研究業績とともに学校教育活動を振り返ろうと思っていたこと、加えて、長年携わってきた地域貢献活動、社会教育活動などを纏めてみたいと思っていたところへ、ネット情報でTPWSが目に入った。年末で多忙を極めていたが、意を決して参加を申し込んだ。

【執筆】

書く内容は山とあるので、項目決定と配列に苦慮した。しかしメンターの助言でかなり明確になった。道德教育の担当者としてTPに取り組んだが、学校教育活動と同じくらい社会教育活動、ボランティア活動に携わってきたので、教職課程と同様に社会教育としての道德教育をも考えるようになってきた。

【指導】

メンターとの対話が無ければ、研究論文や文芸作品の執筆になってしまう。メンターの助言で、自己や研究や活動の新たな面が見えてきた。それを文章化してさらにメンターの助言を得るのである。40年以上前に初めて論文を書いた時に先輩や助手の方に何度も指導を受けたことを思い出した。

【懇親会】

4回の会食に伴う意見交換の機会は非常に刺激的であった。参加者のつぶやき、発言は私を覚醒させ、私に新たな知見を与え、新たな覚悟を促した。飲や食を共にすることは、一体感が生まれ、絆が強まる。PCを叩く作業は孤独であるが、仲間として作業している雰囲気心地よい。

【効果】

今年度も6つの大学で、教職課程の道德教育を担当している。今回のTPを通して、私の一方通行の講義が学生には受け入れられていないことが明らかになり、その改

善策の一つとして、マイクロ・ティーチングを再開した。学生には大好評である。さらに工夫、改善の余地があるので、その展開が楽しみである。

【執筆の効果】

研究論文は文献や事象を精査し、論理的に検討を加え、執筆するが、TPは自分並びに自分の活動を精査し、論理的に検討を加えることのように思える。私は非常勤講師歴が長いので、数えきれない履歴書、研究業績を書いた。しかし、教育理念や教育活動、研究活動を自己の体験として総括することはなかった。

TPを執筆するに当たり、これまでの教育活動、研究活動、社会貢献活動などを総合的に振り返り、まとめる機会を得た。それは取りも直さず自己の生き様・自分史、つまり私の道徳を振り返ることであった。

福山智子 FD委員会活動の一環として、2012年7月に北野先生を本学にお迎えし、ミニワークショップを開催した。短時間であったがその作業は大変楽しく、あっという間に与えられたシートに2色の附箋を貼ることができた。その時、自分自身が「今なぜここにいる（摂南大学看護学部で研究職に就いている）」のかを考え、欄外に書き込んでみた。すると、臨床も含めた何十年間のその時々の臨床看護や教育にかける強い思いと転機に気づくことができた。ミニワークショップに参加するだけで、「だから今私はここにいる」という教育にかける強い思いに気づくことができた。

それから8日後、大阪府立大学工業高等専門学校内で3日間のTP作成WSに参加させて頂く機会を得た。TPの作成過程では、「教育の理念」と「教育の方法」に時間を要した。ミニワークショップで気づいた教育にかける強い思いは、「教育の理念」の本質にあたるが表象レベルであり、言語化して整理するのが難しかった。また、ミニワークショップで附箋に記した多くの教育実践は「教育の方法」であるが、つまりそれはどういうことかという抽象化が困難であった。これらの作業に、個人メンタリングが非常に役立った。全く異なる学問領域のメンターは、同領域の者であれば意識しない内容を質問される事があった。筆者は丁寧に説明することで、重要だが自分の中で意識化できていないことに気づけた。TP作成には、個人メンタリングのこのようなやり取りが最も重要であり、イメージから言語化へ、事実から抽象へという認識の上り下りを手伝って頂ける機会であったと考えている。「教育の方法」迄を個人メンタリングで明らかになると、「授業評価/成果」「教育の改善」「今後の目標」迄は、一気に言語化できた。「今後の目標」については、メンターから負担がないか、実現可能か、さらに是非実現して欲しいというエールを送られ、嬉しかったのを覚えている。

夕食会では、他のメンターや参加者と意見交換ができて有意義であった。帰宅後にその日のTPを提出するのは大変であったが、3日間自分とこれほどじっくり向き合ったことはなく、修了式では達成感でいっぱいであった。TP作成後に、企業の教育セミナーで看護教育の実践方法に関する講師を引き受けることになったが、自身の教育理念や方法を明確に説明できたのは言うまでもない。作成できたことを大変感謝している。

藤田直幸 数年前よりTPWSへの参加のお誘いを受けていたが、なかなか時間が取れず参加できなかった。今回のWSも、冬休み直前の卒業研究指導の山場の時期であったため、参加をかなり迷ったが、ちょうど自身の教員としての在り方についていろいろ考え、悩むことが多かったため、参加を決意した。

私のTPは、「1.なぜティーチングポートフォリオを書くのか?」から始まる。ここ数年の私は、充実した毎日を過ごし、それなりの実績を上げていたが、その反面、学生と接する時間が著しく低下し、「教師」としての仕事に割く時間が大幅に減少していた。教員になった時に目指していた教師像と今の自分との間に大きなギャップがある。このギャップに向き合うことが、TPの作成の理由であることを明確にして執筆を始めた。

続く、「2.何をやってきたか【教育の責任】【教育方法】【教育の成果】」では、私自身のこれまでの活動の整理に取り組んだ。この章では、自分がここ数年頑張ってきたことをまとめ、自分自身を客観的に評価するデータを得ることが出来た。次の章の「3.私が、学生にこうあって欲しいと願っていること【教育の理念】」では、私が、今まで学生に伝えてきたことと、学生たちにこうあって欲しいと願っていることについてまとめた。改めて、教育者としての自分のスタンスの確認ができた。

今回の私のTPでもっとも重要な章が、「4.なりたかった教師像と現状【教育の理念の再確認】」である。自分の少年時代の経験を振り返り、教師を目指した理由をもう一度探り、正直に書いてみた。また、目指していた姿と、現在の自分の姿との間にあるギャップの原因がどこにあるか、自分の得意なこと、不得意なことは何かなど振り返ることができた。最終的には、自分の今の在り方を受け入れ、最初に目指していた教師像とは違うが、自分が得意としていることを大切にしていけば良いという結論に達することが出来た。

「5.これからの私の方向性【教育の目標】」では、「人づくり」という教師の直接的な仕事のウェイトは下がっていくが、「人を作る仕組みづくり」という仕事に、これまでの経験を生かし、さらに注力していきたいという方向性が確認できた。最後に、「6.具体的に開始すべきこと、

やめること, もっとやるべきこと」で, 具体的な行動の計画をまとめることができ, このWSの参加が有意義なものとなった。

眞野祥子 2012年4月に開学した摂南大学看護学部に着任し, FD委員となった。学部のFD活動計画を立案する際, TP導入の話があがった。そこで早速, 北野先生に相談に伺ったところ, ①学部の教員に対してTPに関する講義とミニワークショップを開催する, ②自身がTPを書く, ③摂南大学看護学部でTP作成WSを開催する, の3ステップを勧められた。そこで, 2012年7月にミニワークショップを開催後, 第8回TP作成WSに参加した。私はこれまで, TPのことに全く知識がなかった。WSに参加するまでに『ティーチング・ポートフォリオスターターブック』を読み, 自分なりにTPがどんなものかを理解し, イメージしてからWSに臨んだ。

これまで11年と数か月, 大学教員をやってきたが, 自分が大切にしている教育理念を明確に思い描くこともなく, むしろ, 「ポリシー(理念)がないのが私のポリシー」と思ってやってきた。しかし, メンターとのメンタリングを通じて, ポリシーを持つとしない気持ちの裏には, 「自分の考えを学生に押し付けたくない, 学生自身になりたい自分になってほしい」という気持ちがあり, それは学生時代の経験が影響していたことに気付くことができた。この発見に至るまで, メンターの先生には様々な角度から質問・提案をしていただいた。メンターがメンティーの話の聞く姿勢というのは, カウンセリングの基本態度に近いものがあると感じた。どんなことを言っても否定せずに全てを受け入れてもらえるという安心感から, 躊躇することなく今までの自分の経験や考え方を話すことができた。TPを書く機会, メンターとの出会いがなければ, この気づきはなかったかもしれない。

これまでに全く接点がなかった大阪府立大学工業高等専門学校という場で, 自分の専門分野外の先生方と一緒に3日間過ごした経験は, とても新鮮であった。TPを書きながらの自然な情報交換, 夕食会, 発表を介しての情報交換では, 他の学校での学生の様子や先生方の教育に対する考え方など, 参考になるものばかりであった。2012年度3月に摂南大学看護学部でTP作成WSを開催し, その際にはメンターとして参加した。この時の状況と比べても, やはり, 3日間, 自分の職場を離れてTP作成に専念できる環境というのは大変ありがたいものだと感じた。

今後は, 明確になった理念をしっかり自覚した上で教育・研究活動に取り組み, それが自己満足に陥らないよう, 自己・他者からの評価を受けながら常に改善し続けていくことが目標である。

森谷利香 私は, 勤務する大学でTP作成WSを開催するにあたり, 大阪府立大学工業高等専門学校において初めてTPを作成しました。3日間のWSの中で最も印象に残っているのが「メンタリング」を受けたことです。私は, このとき久しぶりに自分のことを語ったと思います。また, 3日もかけて, 教育や研究のことについて自分を語り, 振り返り, 記述したことは全く初めての経験でした。研究活動において, 自分が対象者に「なぜですか?」と尋ねたり, 教育活動において「なぜ学生はあの行動をしたか?」など, 疑問を他者に向けることはよくありますが, 自分の考えや行動に対して, ここまで「なぜ?」と疑問を向けたことはなかったと思います。メンターは, スタートアップシートをはじめとして私の書いたものに対して「それはなぜですか?」と, 一つ一つ丁寧に聞いてくださいました。最初は専門分野が違うから, 単に疑問に思っておられるかと思っていました。しかし, メンターから聞かれた一つ一つの問いに答える中で, 「自分の考え」は何なのか, なぜ自分はこの活動を行ってきたかなどを, 自ずと振り返ることになり, 最後には「メンターが自分の鏡である」ということが納得できました。

私の場合, 自分の育てたい学生像には, 自分の臨床での勤務経験や, 大学院での研究活動が影響しており, 特に教員である前に「看護師である自分」が確かに存在していることに気づきました。そして学生に倫理観や自己研鑽力を身につけてほしい, また, 社会人としての基礎力を養ってほしいということを思っていることが明確になりました。これらのキーワードは, 自分の中にありましたが, WSを通して, つながっていく時には書く作業も楽しかったです。「自分の考え」と向き合うことで, 自分の中の矛盾も再認識することがありましたが, それも含めて新たな自分を発見するような思いでした。また, 私にとってはバラバラと思っていた考えと行動が統合されて, 筋道を通ったような, スッキリした経験でした。何か思いは持っているけど, でも「何となく」教育活動してきた自分と向き合いTPを作成した経験を通して, 今は以前より目的を持って教育研究活動ができているような気がします。教員として, まだまだ未熟ですが, この早い時期にTPを書くことが出来て良かったと思っています。

最後に, 他分野の参加者たちと3日間同じ釜の飯を食べ, 共に同じ空間で苦しんだ経験は, 学生に戻ったようで貴重な時間でした。仕事を離れて, 特別な時間, 空間で作成に専念することの意義がよくわかりました。WS開催にあたって, 企画, サポートしてくださった皆様, メンターの先生に感謝申し上げます。

山下哲 大学院博士課程修了後すぐ木更津高専に赴任して19年目になるが, 自己の教育改善を続けるばかりで,

ふり返りをじっくりと行っていないのではないかと感じていた。そこで、WS参加を機に腰を据えて自己の教育に関するふり返しを行うことにした。

私の教育改善方法は、他の教員と教育について「対話」することで改善すべき点を探るという方法である。対話者に私の教育に対する考えをぶつけ、対話者の反応を見ながら改善すべき点を抽出していく。また、対話者の優れた教育について理解し、その方法を取り入れていく。この繰り返しで自己の教育を確立してきた。つまり、今までにその場その場のふり返しは行ってきたのである。実は、この「対話」に私の教育理念があったのだ。

初日の第1回個人メンタリングでは、メンターから発せられる質問に答える形で自己の行ってきた教育に関するふり返りを求められた。当時は、WSを進めていくうちに自然と私の教育理念が姿を現し、自己の教育に関するふり返りができると信じていた。メンタリング終了後、TP作成に取りかかり、今まで行ってきた教育について記すことはできたが、教育理念の兆しが全く見えない状態だった。第2回個人メンタリングでも改善できず、夕食時の情報交換会でこの不満をぶちまけ、ついにスーパーバイザーにメンター変更を申し出るという暴挙に出してしまった。

2日目朝の第3回個人メンタリングでは、メンターの変更もなく行われた。今から思えば、前回までのメンタリングとは異なり、私の教育理念に繋がるような質問が多く発せられた気がする。私にいろいろな教育事例を語らせる、私が教育する上でどんなことを大切にしているか考えさせる、など教育理念は何かを私自身に気付かせようとしてくれた。残念ながら、そのときに気付くことはできなかった。昼食時の情報交換会でTP作成に関するお悩み相談となり、間髪を入れず私が自己の教育理念が見えないと発言し、担当でないメンターから、型に当てはめず自分の思い通りに書くという助言を受けたが、まだ見えないままの状態が続いた。午後のTP作成では教育事例を書いたに過ぎず、第3回個人メンタリングでも理念が見えていなかった。しかし、大きな転機が夕食時の情報交換会に訪れた。個性溢れる強力なメンター陣に囲まれ、私の教育理念を発掘する作業が行われた。私が「対話」を通して教育改善してきたという持論を述べていくうちに、私の教育理念は「対話」にあることに気付かされていった。その結果、一晩で第2稿を一気に書き上げることができた。

3日目は自己の教育理念を知った喜びを満喫し、私にとって忘れることのできないWSとなった。皆さんにも、TP作成WSを通じていろいろなメンターと関わり合い、自己の教育理念を確立することをお勧めします。

山本 勇 TPとはどんなことか、何をする或いは作成するのか、などを知りたいと思い参加しました。北は千葉県、南は広島県など沢山の大学・高専から参加されていることに少々驚き、インパクトの高そうな取り組みのようだと感じたことを思い出します。大学の教員の集まりであり、懇親会もあつて意見交換する時間もあるから必ず何か得るものがあるであろうと期待もしました。

会は主催校のご挨拶に続いて日程と作業の段取りが説明され、忘れて勝手なことを始めてしまったとしてもメンターがコントロールしてくれそうだと身勝手に考えて気持ちを楽しんでスタートとなりました。メンターは私より一回り以上若い方（田中洋一さん）で、さてどんな導きをしてくださるのか、お手並み拝見、しかし、的確で示唆に富んだメンタリングでした。私としては謙虚にお話に耳を傾け、真剣に考えて自分の考えをお話ししていたと思います。

先ず、ポートフォリオの目次を案出することから始めました。目次が決まると何を考えるべきかが決まってきますが、矢張り、ひな型が有る方が楽に目次の設定もできます。今回は、1. 教育の理念、2. 教育の責任、3. 教育の方法、4. 授業評価、5. 教育の成果、6. 教育の改善、7. 今後の目標、8. 添付資料、としました。PDCAサイクルに似ていますが、教育の方法と授業評価は、教育の理念や教育の責任に関する視点が異なれば違う内容になることは自明です。教育の理念と教育の責任の項は、今回のTPに取り組む目的と連動しますし、取りも直さずポートフォリオの表題に反映されるものです。自分の教育理念を思い浮かべ、書くべき内容を決めて、表題を「学びが身に着く教育とはどのようなものか」にしました。

この課題に最近では取り組んでおり、それに関するエビデンスがあります。重要なことはエビデンスであり、その中身で、理想を並べて議論をしたり空想に耽ることではないのが教育です。エビデンスを思い出しながら、即ち、どんな教育が求められているのか、何をすべきなのかと考えて行ってきたことを確認し、教育に対する自分の態度、実践についての振り返りから教育の理念、教育の責任の項の記述を始めました。今、ポートフォリオを見直してみると、教育の責任の項でゼミと卒業研究に言及していないことに気付きました。時間に追われながら書いていたのだなと改めて感じます。

教育の方法について敢えて強調しますと、「学生を図書館へ案内しよう」「そこで勉強の種を見つけて貰おう」「課題を与えて学修する頭と体を作ってもらおう」これらを通して、学ぶ楽しさ、発見の喜び、学びを共有する努力の大切さを感じ、学びが身に着くようになるのではないのでしょうか。皆さんもお試しになり、成果を交換したい

です。

メンターとスーパーヴァイザー(栗田佳代子さん)から最後に、今後の目標は短期目標と長期目標に分けて考えるようにとご指摘を頂きました。難しいことですが、6項目の教育目標を書き上げられましたのはお二人のアドヴァイスの故と改めて感謝申し上げます。

今回のWSへの参加は、教育研究に携わる者としての自分を振り返りまとめ上げる良い機会となりました。お誘いくださった北野健一さんに感謝申し上げます。終わってみれば楽しかった、皆さんとまたお会いしたいです。

4. おわりに

本稿では、2012年度に開催したTP作成WSにメンティーとして参加した12名の感想を記した。

本校が最初の学内WSを開催したのが2009年。爾来、TPWSを開催する高等教育機関は増加の一途をたどっている。

本校のWSは学内WSと銘打っているが、第2回(2010年1月)から学外の参加を受け入れ、第3回(2010年8月)ではスーパーバイザー以外の外部メンターを受け入れている。この第8回と第9回でもそれぞれ1名ずつ、スーパーバイザー以外の外部メンターにご参加いただいている。

学内WSは、既報でも述べたが、同じ職場の中での信頼関係の構築や教育議論の活性化など数々の効用があり、非常に有効なFD活動となっている。これらの効用は、メンタリングという“仕掛け”に負うところが大きい。今回もほぼ全ての参加者の感想にそのことが述べられている。このメンタリングは、実はメンティー以上にメンターにとってFD効果が高い。よって、我々は、TPを作成したら、次はメンターとしてWSに参加することを推奨しており、本校ではどんどん新しいメンターを養成している。メンティーが執筆をしている裏で、メンターはメンター会議を行い、他メンターのケースを共有し、時には初心者のメンターを支え、WSを実施している。この中で、メンティーもメンターも成長している。

最近では、本校でTPを作成した外部の方も、本校でメンターを経験していただいている。学内WSと言いながら、

学内の未作成者が残り少なくなり外部参加の割合が増えてきているのが最近の傾向であるが、他校の事例に学ぶことも多く、何より同じ教員同士、教育実践に啓発されるのは学内学外を問わない。

本校では2013年8月7~9日に、第10回目となるTP作成WSを行い、TP作成者が46名(63%)となった。WSの開催にあたっては準備、当日の運営、後片付けに至るまで、ほぼマニュアル化されており、多大な負担なく運営できるまでになっている。第11回のTP作成WSは2013年12月26~28日に開催予定である。この原稿がこれからTPを作成する諸氏の参考になれば幸いである。

本研究は日本学術振興会平成23年度(2011年度)科学研究費補助金(基盤研究(C))「高専におけるティーチング・ポートフォリオの普及とメンタリング技能に関する研究」代表者北野健一(課題番号23501044)による支援を受けて実施した。

参考文献

- [1]北野ほか:日本初単一教育機関内ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップを開催して、大阪府立高専研究紀要,第43巻,pp.63-70(2009)
- [2]北野ほか:第2回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告,大阪府立高専研究紀要,第44巻,pp.57-64(2010)
- [3]北野ほか:第3回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告,大阪府立大学高専研究紀要,第45巻,pp.47-52(2011)
- [4]北野ほか:第4回ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告,大阪府立大学高専研究紀要,第45巻,pp.53-58(2011)
- [5]北野ほか:2011年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告,大阪府立大学高専研究紀要,第46巻,pp.63-70(2012)
- [6]大阪府立大学高専ティーチング・ポートフォリオ研究会編著,実践 ティーチング・ポートフォリオ スターターブック ~実質的な教育改善活動を目指して~,NTS出版(2011)。